

54名、計104名から回答を得た。参加者の回答率は58%であった。図書館司書の経験年数、および医学図書館員としての経験年数は参加者がそれぞれ5.7年、5.5年長かった。参加者の参加年度は1998年度6名、1999年度15名、2000年度19名、2001年度6名、不明4名であった。非参加者のうち、参加者がいない図書館からの回答が2名あった。

業務への有用性については、ワークショップ参加者の88%がその後の業務に有用であったと答えた。参加者の48%がその後WSの参加者と情報交換をしたと答えた。

日常の文献検索業務については、検索依頼を受ける割合は参加者に多かった。今後の図書館員による検索業務は減るだろうとの予測が多く、その理由としては、エンドユーザー自身による検索の増加が指摘された。

図書館業務以外の研究、臨床支援活動、教育活動への関与は、参加者に多かった。

EBMに関する10問の質問の結果、参加者は非参加者に比べて正確な知識を持っていた。しかし、診療ガイドライン策定に必要な人的資源、図書館情報学と疫学の用語の対応、研究デザインの判別の項目では参加者と非参加者に正答率の差は無かった。

医学図書館の状況として、EBMを支援する二次資料データベースについて、コクランライブラリーが約半数の施設で利用できるのに対し、UpToDate、Clinical Evidenceは1割程度の施設でのみ利用可能であった。購入雑誌数、オンラインジャーナル数は施設によって大きく差があった。最近の購読雑誌数は、半数の図書館で減ったとの回答があった。

D. 考察

医学図書館を対象としたワークショップの参加者は非参加者に比べて、文献検索業務、他の研究活動、臨床支援活動、教育活動への関与が高かった。また、EBMの知識の正確性も高かった。ワークショップへの参加が医学図書館員の臨床支援活動能力の改善に一定の効果を果たしていると考えられた。

参加者と非参加者には司書としての経験年数などの背景に違いがあった。しかしながら、医学図書館司書を主たる対象としたEBMに関するワークショップは本邦には他にないことを考慮すると、本教育プログラムの効果は評価されるだろう。

今後、ワークショップ参加者の一層の臨床支援活動やガイドライン作成への関与が期待される。

EBMの知識に関して、図書館情報学と疫学の用語の対応、研究デザインの判別の項目の正答率は参加者においても低く、この領域の教育方法が今後の課題である。

医学図書館におけるEBMに関する二次資料の整備は十分といえなかった。二次資料のうちコクランライブラリーに比べてUpToDateやClinical Evidenceを導入している医学図書館は少なかったが、この理由としてコクランライブラリーよりも後から開発されたこと、価格が高いことが考えられた。また購読雑誌数が減少傾向にあることは、今後、医学図書館による臨床支援活動能力の低下が懸念された。

E. 結論

図書館司書へのEBMの教育と参加者の

周囲への知識の波及に関して、開発された教育プログラムが一定の効果を果たしていると考えられた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

津谷喜一郎、金子善博. 医学図書館員の臨床支援能力を高めるためのワークショップの教育効果. (投稿中)

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

(資料 1)

医学図書館員の臨床支援能力を高めるためのワークショップの教育効果の予備的解析結果

本研究は「EBMを支えるリサーチライブラリアン養成のための研究」により実施した医学図書館員を対象としたワークショップ参加者を対象とした。同研究は、1998年は厚生科学特別研究（主任研究者：中島宏）として、1999年・2000年・2001年の3年間は厚生科学研究（主任研究者：緒方裕光）として実施された。そこでは、(1) 医学図書館司書を対象としEBM全般の理解と業務の改善を目的としたライブラリアン向けワークショップ（EBMリサーチライブラリアンワークショップ）、(2) 医学図書館司書を対象とし医学論文の批評的吟味の手法の体得を目的としたCritical Appraisal Skill Programme (CASP)ワークショップ、および(3) 医学情報の流通に関わる医学メディア編集者むけワークショップ（EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ）の3種類のワークショップを行った。Table 1に実施ワークショップ開催地と各参加者数を示す。

また、Table 2からTable 5に今回実施したアンケート結果の詳細を示す。

Table 1 実施ワークショップ開催地と参加者数(人)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度
EBMリサーチライブラリアンワークショップ	東京 (26)	東京 (57)	大阪 (37)	福岡 (20)
CASPワークショップ	東京 (30)	東京 (30)	名古屋 (30)	
EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ			東京 (13)	東京 (34)

Table 2 回答者の背景

	参加者	非参加者	
男性	13	12	
女性	37	42	
年代			
20代	4 (8.0%)	13 (24.1%)	
30代	16 (32.0%)	20 (37.0%)	
40代	18 (36.0%)	11 (20.4%)	
50代	11 (22.0%)	10 (18.5%)	
60代	1 (2.0%)	0 (0.0%)	
合計	50 (100%)	54 (100%)	
司書経験年数 (平均 (SE))	18.4 (1.3)	12.7 (1.3)	p=0.003
医学図書館司書経験年数	15.2 (1.4)	9.7 (1.3)	p=0.004

Table 3 ワークショップの有用性、日常業務、教育活動、EBM の知識など

	参加者	非参加者	
1) EBM 関連ワークショップへの参加			
ライブラリアン WS への参加	50	-	
WS への参加はその後の業務に有用だった。	42	-	
参加を機会に知り合った人とその後情報交換をした。	26	-	
他の EBM 関連ワークショップへの参加	22	10	
WS への参加はその後の業務に有用だった。	15/22	9/10	
参加を機会に知り合った人とその後情報交換をした。	12/23	3/10	
2) 業務について			
i) 医療関係者からの検索依頼がある (月1回以上)	36/50	23/51	p=0.019
ii) 患者など非医療関係者からの検索依頼がある (月1回以上)	9/49	4/50	
(検索依頼があると答えた回答者に対して) 検索の以来件数は			
増えている	10	7	
変化なし	13	5	
減っている	15	9	
経験年数が無く不明	4	8	
計	42	29	
iii) 今後の検索業務は			
増えるだろう	10	10	
減るだろう	16	14	
わからない	21	25	
計	48	50	
iv) 図書館業務以外の研究活動、臨床支援活動に関わっている	7/46	0/53	p<0.001
v) 診療ガイドラインの作成に公式に関わっている	1/49	0/53	
3) 教育活動について			
この1年間に司書に対する教育活動を行った	15/49	8/52	
この1年間に医療関係者、学生に対する教育活動を行った	36/48	21/50	p=0.004
4) EBM に関して			
EBM という概念を知っている	49/50	43/51	
EBM の知識について(正答者数、正答率)*			
1. 問題の定式化する際の4つの要素	37 (74.0%)	18 (33.3%)	p<0.001
2. 医学情報が表す3つの要素	41 (82.0%)	27 (50.0%)	p<0.001
3. ITT 解析の意味	37 (74.0%)	25 (46.3%)	p<0.01
4. 司書が関与できる EBM のステップ	20 (40.0%)	8 (14.8%)	p<0.01
5. 司書が関与できる施設内の EBM に関連する活動	48 (96.0%)	39 (72.2%)	p<0.01
6. 診療ガイドライン策定に必要な人的資源	20 (40.0%)	15 (27.8%)	p=0.19
7. コクランライブラリーに含まれるデータベースの内容	38 (76.0%)	28 (51.9%)	p<0.01
8. 図書館情報学と疫学の用語の対応	10 (20.0%)	5 (9.3%)	p=0.12
9. 研究デザインの判別1 (3群比較)	26 (52.0%)	14 (25.9%)	p<0.01
10. 研究デザインの判別2 (ランダム抽出)	14 (28.0%)	12 (22.2%)	p=0.50
平均正答数(SE)	5.8 (0.35)	3.5 (0.34)	p<0.001

*EBM の知識を問う設問では、未回答も誤答とあつかった。

Table 4 自由記載の要約

業務全般の最近の変化を取り上げた意見

- 1) PubMedのフリーアクセスや、日本看護協会による協会員へのJMEDのフリーアクセスの提供など、エンドユーザーによる検索が盛んになり、医師や看護師といった従来のサービス対象者への代行検索は減っている。
- 2) コメディカルスタッフなどの医療関係者や患者・家族などへの情報提供の支援の必要性が増大している。

医学図書館司書の状況に対する意見

業務内容に関わるもの

- 1) 代行検索から検索方法や文献の質の教育に求められる役割が変わってきた。
- 2) 医療自体の情報化の進展により情報の専門化としてのサービスのあり方を検討する必要がある。
- 3) サービス内容と対象者の変化に対応するために、司書にもある程度の医学知識が必要となってきた。

司書のおかれている状況に対する意見

- 4) 図書館司書のネットワーク化が必要。
- 5) 総合大学では、司書の人事慣行により学部間の配置換えや事務職が図書館で働くことがある現状が報告された。

医学図書館の問題

臨床研修を含め医療機関、医学部の情報集積機能が見直されている中で、図書購入やデータベースの費用に差があり図書館の間に格差がある。

ワークショップに対する批判的な意見

プログラムの中で実施されたハンドサーチの実習に対して、

- 1) 図書館の司書の業務ではない。
- 2) 医学図書館司書が情報の質の判断まで行うべきではない、業務の範囲をわきまえるべきである。

Table 5 図書館の特徴

	図書館数	(%)*
1) 以下のデータベースが図書館内で使用できる		
PubMed	52	92.9%
医中誌 Web	39	69.6%
JOIS/JICST	30	53.6%
コクランライブラリー	31	55.4%
UpToDate	6	10.7%
ClinicalEvidence	8	14.3%
以下のデータベースが施設内で使用できる		
PubMed	48	85.7%
医中誌 Web	33	58.9%
JOIS/JICST	19	33.9%
コクランライブラリー	25	44.6%
UpToDate	3	5.4%
ClinicalEvidence	3	5.4%
2) 購入雑誌数 (最大値、最小値、中央値)		
購入洋雑誌数	8192, 17, 400	49 館回答
購入和雑誌数	14303, 22, 222	49 館回答
オンラインジャーナルでのみ閲覧できる雑誌数	1932, 0, 191	35 館回答
3) この2年間の購読雑誌数の変化		
増えた	8	15.4%
変わらない	11	21.2%
減った	28	53.8%
無回答	5	9.6%

*アンケートに回答があった54施設に対する割合。

(資料 2)

医学図書館員の臨床支援能力を高めるためのワークショップの教育効果の調査で用いたアンケート用紙

医学図書館員の臨床支援活動に関する調査のおねがい

ver.1.2 2002.7.7

関係各位

「EBMを支えるリサーチライブラリアン養成のための研究」班

分担研究者: 津谷喜一郎

本研究は平成10年度厚生科学特別研究として開始され、平成11年度より平成13年度まで厚生科学研究として実施され、医学図書館司書を主たる対象とした「根拠に基づく医療 (Evidence-based Medicine: EBM)」全般の理解と業務の改善を目的としたライブラリアン向けワークショップを行ってまいりました。

近年の医療情報を取り巻く環境の急激な変化のなかで、今後、医学図書館における臨床支援活動の改善のために必要な諸条件を明らかにする目的で、本調査を行わせていただきたいと思います。

上記、厚生科学研究は平成10、11、12年度の主任研究者は中島宏、平成13年の主任研究者は緒方裕光であります。この間、津谷は分担研究者として継続して関わってきたところから、本調査を企画いたしました。

本調査票は、本研究で行ったワークショップに参加された医学図書館員の方に送付させていただきます。

同封3通の調査票のうち、1通はワークショップに参加されたご本人に、残りの2通は本研究のワークショップに参加されていない司書*の方、どなたかにご記入をお願いしていただけますようお願いいたします。ワークショップに参加されていない他の司書の方がいらっしゃらない場合は、未記入のままかまいません。

本調査内容は、個々の回答や記入内容が記入者を同定できる形式では発表せず、個人情報を守られます。別紙調査票に回答の上、2002年7月31日までにご返送いただけますようお願いいたします。

*同一図書館でこれまでに2名以上参加された場合には、重ならないようにして適当な数の方でお願いします。例えば3名参加されている場合、 $3 \times 2 = 6$ 人ですが、2人から6人までの間の人数でなるべく数が多い方に回答をお願いします。

送付先

<以下省略>

3. 貴図書館について伺います

(1) 以下のデータベースは図書館内で使用できますか？

該当するものすべてに○をつけてください。

- 1) PubMed 2) 医中誌 Web 3) JOIS/JICST
4) コクランライブラリ (CD-ROM/Internet) 5) UpToDate
6) Clinical Evidence

(2) 以下のデータベースは図書館外の貴施設内で使用できますか？

該当するものすべてに○をつけてください。

- 1) PubMed 2) 医中誌 Web 3) JOIS/JICST
4) コクランライブラリ (CD-ROM/Internet) 5) UpToDate
6) Clinical Evidence

(3) 貴図書館での購読雑誌数をお教えてください

洋雑誌： 誌 和雑誌： 誌
(うちオンラインジャーナルのみ： 誌)

(4) この2年の購読雑誌数の変化をお教えてください

- 1) 増えた 2) 変わらない 3) 減った 4) わからない

4. あなたの業務について伺います

(1) 医師、看護師その他の医療関係者から、文献検索を依頼されることはありますか？

- 1) 週に1件以上 2) 月に2-3件程度 3) 数ヶ月に1件程度 4) ない

(2) 患者、患者家族その他の非医療関係者から、文献検索を依頼されることはありますか？

- 1) 週に1件以上 2) 月に2-3件程度 3) 数ヶ月に1件程度 4) ない

(1),(2)いずれかで1)~3)を答えた方に伺います。

(3) 以前(2年前)に比べて、文献検索の依頼件数は増えていますか？

- 1) 増えている 2) 変化なし 3) 減っている 4) 経験年数が無く不明

全ての方に伺います。

(4) 今後の検索業務について伺います

- 1) 今後増えるだろう 2) 減るだろう 3) わからない

その理由:

)

(5) 図書館業務以外の研究活動、臨床支援業務に関わっていますか？

- 1) はい (内容：)
2) いいえ

(6) 診療ガイドラインの作成に公式に関わっていますか？

- 1) はい (内容：)
2) いいえ

5. 教育活動について伺います

(1) この1年間に図書館司書に対する教育活動に従事しましたか？

- 1) はい (対象者と内容：)
2) いいえ

(2) この1年間に医師、看護師その他の医療関係者、学生の教育活動に従事しましたか？

- 1) はい (対象者と内容：)
2) いいえ

6. EBMに関連する事項について伺います

(1) Evidence-based Medicine (EBM)という概念についてご存知ですか？

- 1) はい 2) いいえ

(2) 患者の問題を定式化する際の4つの要素でないものはどれですか？1つ選んでください。

- 1) Patient 2) Exposure 3) Comparison 4) Outcome 5) Bias

(3) 情報が表すものの組み合わせのうち正しいものを1つ選んでください。

- a. 真実 b. バイアス c. 思想 d. 哲学 e. 偶然
1) abc 2) abe 3) acd 4) ad 5) いずれでもない

(4) ITT解析について正しいものを1つ選んでください。

- 1) 病名が間違っただけで参加した被験者は解析からはずす。
2) 薬を一回も飲まなかった被験者は解析からはずす。
3) 投与後のデータが全くない被験者は解析からはずす。
4) 割付けられたすべての被験者を用いる。

- (5) 下記にあげた EBM の 5 ステップにおいて図書館員が活躍できるステップはどれですか？1-6 の組み合わせうち正しいものを一つ選んでください。
- a 問題の定式化
 - b 情報収集
 - c 情報の批判的吟味
 - d 情報の患者への適用
 - e 全プロセスの評価
- 1) b 2) ab 3) abc 4) abce 5) すべて 6) いずれでもない
- (6) EBM を推進するために図書館員がとるべき行動として誤っているものを一つ選んでください。
- 1) モーニングレポートに参加し、提示された臨床質問に関連する文献を配送するサービスを開始した。
 - 2) 図書館で主催する「臨床のための情報検索セミナー」では EBM に特化したデータベースを取り上げ、MEDLINE は教えないことにした。
 - 3) 医師と共同で収集したエビデンスに批判的吟味を加えたデータベースの研究開発を始めた。
 - 4) 代行検索の申し込み用紙にフィルタリングの希望の欄をもうけることにした。
 - 5) 臨床研究のデザインを学ぶために医学部の調査研究法のコースを聴講することにした。
- (7) 厚生労働省がすすめている EBM 指向診療ガイドラインの策定に当たっては、作成委員会を設置することが望ましいとされました。次のうち、その構成員に含まれないものはどれですか？1つ選んでください。
- 1) クリニシャン 2) メソドロジスト 3) バイオロジスト
 - 4) ライブラリアン 5) 患者経験者
- (8) コクランライブラリーについて次の説明文に当てはまるデータベースを1つ選んでください。
- 「RCT/CCT の書誌情報データベースである。Medline、EMBASE の他、他のデータベース、ハンドサーチ、各 CRG での登録からのレコードが含まれている。」
- 1) CDSR 2) CENTRAL/CCTR 3) DARE 4) CMR 5) HTA
- (9) 図書館情報学と疫学の用語の以下の組み合わせのうち誤っているものを1つ選んでください。
- 1) 再現率と感度は同じである
 - 2) 適合率と特異度は同じである
 - 3) 適合率と陽性適中度は同じである

(10) ハンドサーチを行った前向きと比較臨床試験の論文の中に以下の記載がみられた。
「患者を無作為に 3 群に分け、食事療法群、薬物療法群、食事療法及び薬物療法併用群とした。」

この臨床試験はいずれの研究デザインか、1-4 から正しいものを 1 つ選んでください。

- 1) RCT 2) CCT 3) RCT や CCT ではない
- 4) この部分の記載のみでは判定できない

(11) ハンドサーチを行った前向きと比較臨床試験の論文の中に以下の記載がみられた。
「被験者は、保存カルテからランダム抽出し、既往歴により 2 群にわけた。」

この臨床試験はいずれの研究デザインか、1-4 のなかから正しいものを 1 つ選んでください。

- 1) RCT 2) CCT 3) RCT や CCT ではない
- 4) この部分の記載のみでは判定できない

質問は以上でおわりです。ごくろうさまでした。

今後、医学図書館が臨床活動の支援を進める上で必要と思われることをお書きください。

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
津谷喜一郎, 金子善博	The Cochrane Library 2002 issue 4 の現状. シリーズ薬剤疫学 ③ 薬剤 疫学とメタアナリシス	日病薬誌	39(2)	171-7	2003
河合富士美, 木下久美子, 熊谷智恵子, 小田中徹也, 首藤佳子, 濱口恵子, 林伴 子, 福岡敏雄	病院図書館員によるCASPワーク ショップの試み 第1回EBL研究会	EBMジャーナル	3(3)	406-409	2002
河合富士美	病院図書館員の役割. エビデンスを つたえる⑤	EBMジャーナル	4(2)	218-222	2003
河合富士美, 松本直子	システマティック・レビュー, 診療ガイド ライン, 経済分析のエビデンスを探す. EBN実践のための文献検索ガイド 6	EB Nursing	2(2)	218-223	2002
八重ゆかり, 河合富士美	化学療法中のイソジンうがいの効 果. 事例で学ぶ手法としてのEBN	EB Nursing	2(4)	432-439	2002
八重ゆかり, 河合富士美	ヘパリンロックは血液凝固防止に有 効か. 事例で学ぶ手法としてのEBN	EB Nursing	2(4)	440-447	2002
河合富士美, 松本直子	エビデンスをさがすステップと情報 源.	EB Nursing	2(4)	480-484	2002
河合富士美	エビデンスを探す: 情報源とその使 い方	病院図書館	22(4)	176-179	2002

20021290

以降は雑誌/図書等に掲載された論文となりますので、
P.253の「研究成果の刊行に関する一覧表」をご参照ください。

厚生労働科学研究費補助金 医療技術評価総合研究事業
EBMを支える人材の系統的な養成に関する調査研究 (H14-医療-024)
平成14年度 総括研究報告書
2003年3月31日 発行

主任研究者 緒方 裕光

連絡先 国立保健医療科学院研究情報センター
〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6
TEL 048-458-6209 FAX 048-469-0326

印刷 昭和情報プロセス株式会社